30amE-148

切除不能な進行・再発の直腸・結腸がん3次治療におけるセツキシマブとパニツムマブの費用対効果分析

○永尾　香菜子[1], 小林　明日香[1], 座間味　義人[1], 名和　秀起[2], 野間　和広[3], 五十嵐　中[4], 千堂　年昭[2], 名倉　弘哲[1]（[1]岡山大薬, [2]岡山大病院薬, [3]岡山大病院消化器外, [4]東大院薬）

【目的】切除不能な進行・再発の結腸・直腸がんに用いられるセツキシマブとパニツムマブは代表的な分子標的薬として知られ、いずれも高価な薬価が設定されている。両者は同程度の無増悪生存期間(PFS)の延長が認められており、臨床現場ではどちらを優先して使用するのか明確な基準は定められていない。本研究では薬学的視点から医療経済分析を行うことにより両薬剤を比較検討し、優位性を明確にすることを目的とした。

【方法】岡山大学病院にて大腸がん化学療法が施行された20症例と文献調査を参考にシミュレーション患者を設定し、判断樹を作成した。次に期待費用をシナリオごとに算出し、その結果から費用最小化分析を行い、各薬剤の費用対効果、増分費用効果を算出した。また、患者の体重、副作用発現率、副作用治療日数、検査頻度、セツキシマブの無増悪生存期間、QALY、Kras 変異の有無の項目について感度分析を行った。

【結果】PFSにおける一人あたりの期待費用は、セツキシマブが8,533,160円、パニツムマブは 7,062,291 円となり、パニツムマブの方が費用対効果に優れているという結果となった。しかし感度分析の結果、投与量算出方法の違いから体重が80kg を超える場合であればセツキシマブの方がパニツムマブよりもPFSにおける費用対効果に優れていた。

【考察】シミュレーション患者においてはパニツムマブの方が薬剤経済学的に優れており、一定体重以上の場合のみセツキシマブの方が優位となった。このことから投与量の算出基準に違いがある薬剤では、費用対効果において患者背景に強く影響を受けることが明らかとなった。